

前回の「still moving」から約1年。プロジェクトメンバーは移転後の本学のあり方を考えるための学内会議などでも積極的に活動を行うと同時に、本企画「still moving – on the terrace」に向けて準備を進めてきました。本企画を崇仁地域に移転した本学の新たな姿を探る実験と位置づけ、前回に引き続き会場構成を担当する長坂常（スキーマ建築計画）から各メンバーに割り振られた京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA内のさまざまなエリアにて、その場を「誤用」していきます。これは@KCUAの空間を利用した「実験」であり、各メンバーの作品を展示するといった、いわゆる普通の「展覧会」ではありません。また担当箇所はあるものの、ミーティングを重ね、意見を交換しながら構想を練ってきたことから、誰にどの場所が割り振られているかということは敢えて明示しませんでした。そして、会期中には@KCUAおよび崇仁地域で数々の「実験」を行っていきます。日々その姿を変えていく空間を目にすることもあれば、時には普段は閉ざされた扉が開き、作業を進めるメンバーの姿に出会うこともあるでしょう。数年後にはそれが、崇仁地域の「日常」となる。この大きな夢に向けた「実験」をお楽しみいただけましたら幸いです。

プロジェクトメンバー

金氏徹平プロジェクト

金氏徹平 [京都市立芸術大学美術学部彫刻専攻講師]

今井菜江 [彫刻・M2]

河原功也 [芸術学・M2]

小松千倫 [構想設計・M2]

許芝瑜 [彫刻・M2]

平田万葉 [陶磁器・M2]

藤田紗衣 [版画・M2]

松永愛沙 [デザイン・M2]

本山ゆかり [油画・M2]

森美哉子 [構想設計・M2]

高橋悟

長坂常 [スキーマ建築計画]

坂東幸輔

森野彰人

プロジェクト・コーディネート

藤田瑞穂 [京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 学芸員]

設営スタッフ

池田亜耶子 池田精堂 大西治 岸野史義 岸本光大 熊谷卓哉

熊野陽平 倉智敬子 鈴木理咲子 田川莉那 寺嶋剣吾

西原将 [スキーマ建築計画] 二瓶晃 人長果月 松宮恵子 安田知司

協力

藤本真理 安田溪

小山田徹

Gゼミ

井上明彦 [京都市立芸術大学美術学部教授(造形計画)]

亀井寿美 [VD・卒業生]

熊田悠夢 [漆工・M2]

田中美帆 [彫刻・M2]

出口義子 [日本画・M2]

前田菜月 [漆工・修了生]

杉山雅之

Studio INAMATT

still moving on the terrace

京都市立芸術大学は数年後に、JR京都駅の東側エリアである「崇仁地域」への移転を予定しています。2015年3月7日ー5月10日には、国内外のアーティストが集い、この地域へ移動していく「第一歩」として、展覧会「still moving」を実施しました。その後も、この地域が国際都市・京都の文化芸術の新たな拠点となることを目指し、交流事業や学生の展示など、さまざまな移転プレ事業を継続的に展開しています。

そしてこの春、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAをメイン会場として「still moving – on the terrace」を開催致します。本企画では、本学関係者を中心としたプロジェクトメンバーが、移転後の本学が果たす役割を想定しながら、ギャラリー@KCUA内のあらゆる場所で、そして時には崇仁地域にて、日々その形を変化させつつ、新しい生き方・働き方・コミュニケーションの仕方を模索していきます。それは、一般社会ではリスクがあると思われることでも、失敗を怖れずに取り組むことができる大学だからこそ可能な、日常的な価値観の外側に軸足を置いた創造的実験になることでしょう。「still moving」は、未来の芸術大学の姿を思い描きながら、オルタナティブの新しいかたちを求め、挑戦を続けているのです。

2016.4.16 |sat| – 5.29 |sun|

主催：京都市立芸術大学
協力：京都市
平成28年度文化庁優れた現代美術の海外発信促進事業



京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA
KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS GALLERY

京都芸大の移転のコンセプトでもある On the terrace 的活動の精神を見ていただくこう考えた。その結果、会場である@KCUA というギャラリー内の施設を誤用しもう一つの@KCUA を感じとってもらおうと考え各所に新たな用途を振り分けました。どんな誤用かは見てのお楽しみ。

長坂 常 [本展会場構成]

フローとストック

1. 吉岡俊直《Cubic-Ectype(empty)》
 大学院美術研究科絵画専攻修了作品(版画)
 材質:ゴム / インク
 技法:セリグラフ
 制作年:平成9年(1997)
 110.5×110.5×7.2

2. 岡村寛生《ジャーマン・スープレックス・ホールド》
 美術学部美術科油画専攻卒業作品
 材質:板・麻布 / 油絵具
 技法:油彩
 制作年:平成4年(1992)
 316.0×210.0

3. 長谷川直人《在(界) I》
 美術学部工芸コース陶磁器専攻卒業作品
 材質:陶土
 技法:焼成
 制作年:昭和58年(1983)
 53.0×53.0

4. 永楽保全《染付雲堂文火入》
 材質:陶土 / 釉
 技法:焼成
 制作年:江戸時代後期
 7.9×11.0×11.0

5. 作者不詳《ヤシ殻笛》
 材質:ヤシ殻 / 顔料
 技法:彫刻・著彩
 制作年:20世紀

6. 富本憲吉《色絵優子用湯呑》
 材質:陶土 / 釉薬
 技法:焼成
 制作年:昭和時代
 6.2×8.2×8.2

7. 作者不詳《一休和尚像(没倫紹等)》
 (東京:東京国立博物館/原本)
 材質:和紙/墨・顔料
 技法:墨画・部分膠彩
 制作年:昭和時代(20th century)
 16.0 × 25.6

ホテル養生

代表的日本人

8. 作者不詳《仮面》
 ニューギニア民族資料
 材質:木
 技法:彫刻
 制作年:20世紀
 71.5×17.0

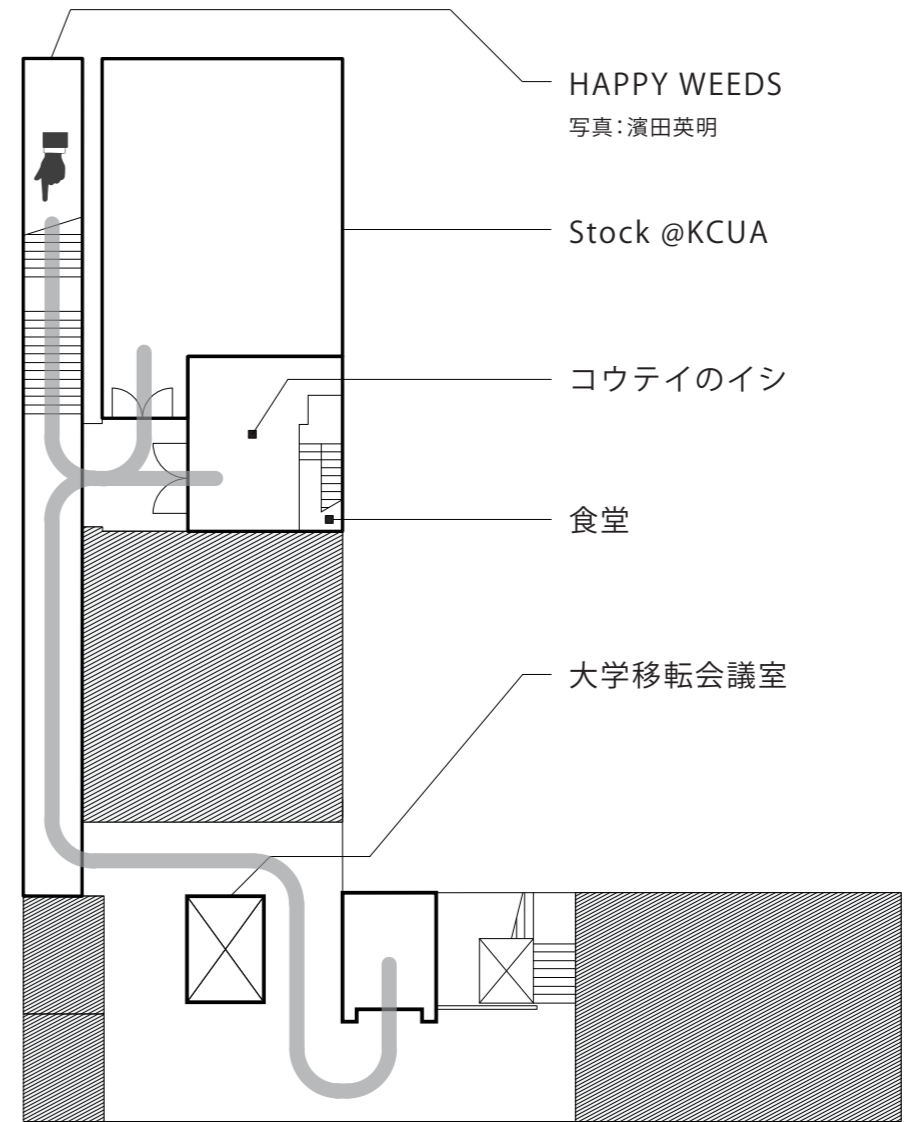
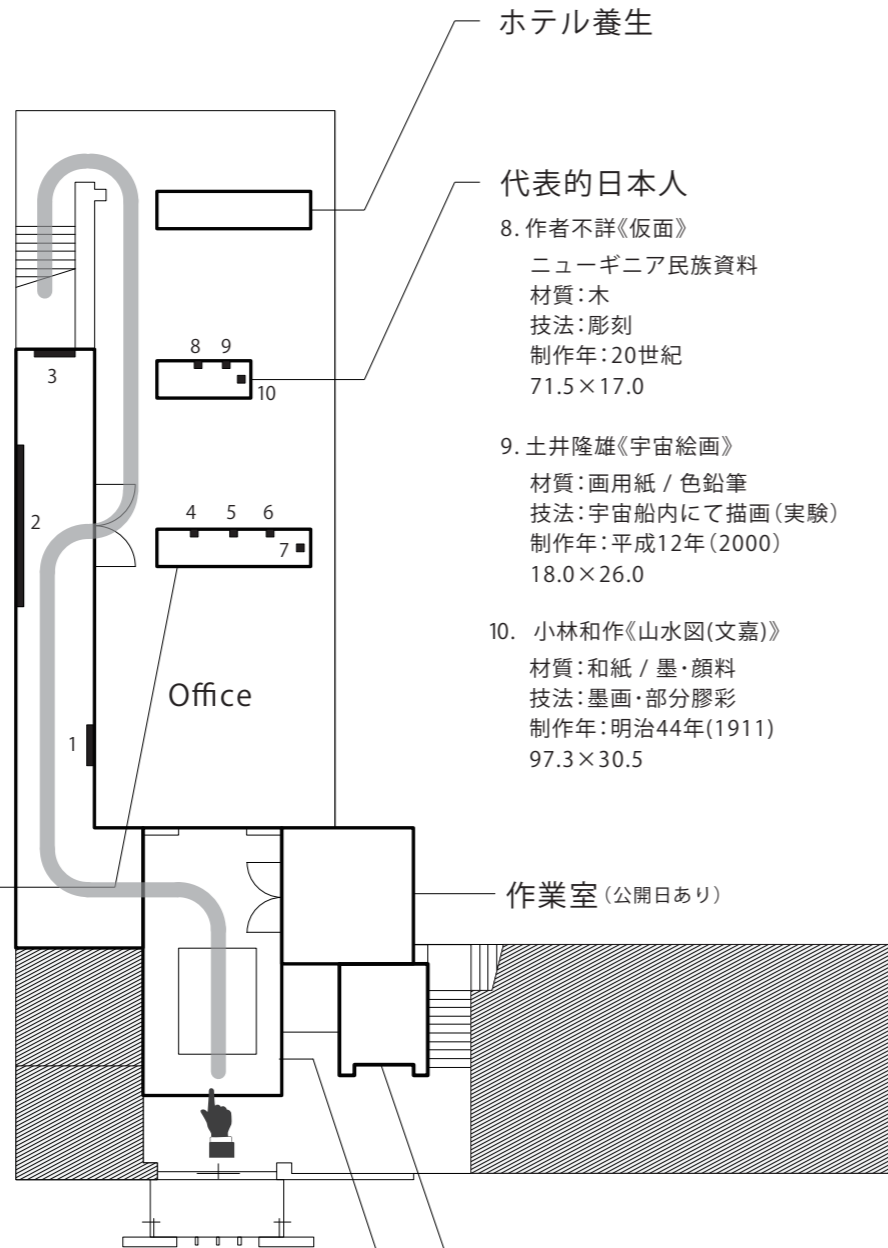
9. 土井隆雄《宇宙絵画》
 材質:画用紙 / 色鉛筆
 技法:宇宙船内にて描画(実験)
 制作年:平成12年(2000)
 18.0×26.0

10. 小林和作《山水図(文嘉)》
 材質:和紙 / 墨・顔料
 技法:墨画・部分膠彩
 制作年:明治44年(1911)
 97.3×30.5

作業室 (公開日あり)

EV × 学長室 × 工具箱

under the table / 広場

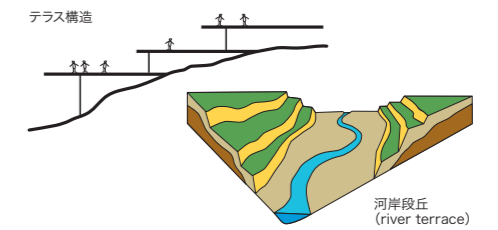


《terrace》とは、内から外に張りだして、人と人びと、人と自然とを触れあわせる共有空間である。崇仁地域での京都市立芸術大学新キャンパスを、「京都の市民文化の新たな火床」(床=テラス)として位置づける。

《terrace》とは、複数の世代、異なる関心をもつ人びとが、地面から少し浮いた板敷きの場所で(つまり、目下の利害関心から自分を外し)、自分たちの現在と子どもたちの未来を語りあう場所である。

terrace [英]、terrace [仏]

古フランス語では「盛り土」を意味する。< terra[ラ]土、大地、地球
 ・建築におけるテラス:建物本体からの突き出し部分、屋根の上の面
 ・地形におけるテラス:高低差のある平坦な面
 →五感を刺激する共有空間
 →懐かしい驚きで、うきうきと心躍る場所



※ 1-10は全て京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品